

奈良盆地の小学4年生を対象とした奈良県南部の 山村地域に関する授業の提案と実践

—地域多様性の理解を深めるために—

河本大地 奈良教育大学社会科教育講座 (地理学)
井上恵太・越尾裕介 奈良教育大学学部在学
中窪寿弥 奈良教育大学附属小学校
山方貴順 奈良市立都跡小学校
二階堂泰樹・豊田大介・高翔 奈良教育大学大学院在学
池辺優輔・峰重勇海 奈良教育大学学部在学
壁阿紀 奈良教育大学卒業

Development of a New Class on Mountainous Areas in Nara Prefecture for Elementary School Children in Nara Basin

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Keita INOUE, Yusuke KOSHIO

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Toshiya NAKAKUBO

(Elementary School, Nara University of Education)

Takanobu YAMAGATA

(Miato Elementary School, Nara City)

Yoshiki NIKAIDO, Daisuke TOYODA, Sho KO

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

Yusuke IKEBE, Isami MINESHIGE

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Aki KABE

(B.A., Nara University of Education)

Abstract

This paper examines how to facilitate children (4th grade pupils at an elementary school) to understand regional diversity inside Nara Prefecture where has many people in Nara Basin and less people in mountainous southern areas. As a practice of education for sustainable development, the authors develop some lesson plans.

キーワード：地域多様性, ESD (持続可能な開発のための教育), 山村, 奈良県吉野郡川上村

**Key Words : Regional diversity,
Education for sustainable development,
Mountainous Village,
Kawakami Village, Nara Prefecture**

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

日本の陸地面積の約3分の2は森林である⁽¹⁾。その大半は人の手が加わった人工林や二次林である。その周辺には人の暮らしがある。しかし、学校教育でどれだけその内実が扱われているだろうか？ 人間は自然の中で生かされているわけだが、そのリアリティを感じる機会が学校教育にどれだけあるだろうか？

本稿で扱う奈良県は、広大な森林（多くは人工林）を南部に有している。その周辺には山村と呼ばれる、斜面にへばりつくような集落や谷底の集落が数多く分布している。これらは奈良県の学校教育においてどれだけ学習対象となっているだろうか？ あるいは教材として活かされているだろうか？

筆者のひとりである河本は、2015年4月に奈良教育大学に着任した。本学には奈良県で生まれ育った学生が数多くいるので、このあたりの事情を聞いてみると、あまりかんばしい答えは返ってこない。また、「奈良県南部にある橿原市から来ています」、「南のほうは山しかない」、「あっちのほうは単なる田舎」といった発言が当たり前のようになされている⁽²⁾。

そこで本研究では、地域多様性⁽³⁾、とりわけ奈良県におけるそれに関して子どもの理解を深めるにはどうしたらよいかを検討する。特に、奈良県において人口の集中している奈良盆地の子どもたちが、森林や山村の卓越するいわゆる「山間へき地」の多い奈良県南部について理解を深めるための工夫を考える。また、あわせて、奈良県に位置する教員養成大学である奈良教育大学の学生が、奈良県南部についてフィールド学習を通じて理解を深め、その成果を授業で活かすための道筋についても検討する。

まだ十分な成果は出ていないが、本稿は上記目的を達成するための初期段階の実践記録としたい。

1.2. 研究方法

本研究は、学部生（主に社会科教育専修2回生）向け科目である「地域生態論」、および大学院「社会科内容論（地理学分野）」の受講生とともにおこなった。対象地域として奈良県吉野郡川上村を選定し⁽⁴⁾、下記行程で2015年12月5日・6日の1泊2日で訪問した。

1日目

- 10:00 送迎バス大和上市駅出発
- 11:00 森と水の源流館（川上村宮の平）着
 - ・受付
 - ・名札作成
- 11:15 森と水の源流館発

- 12:15 吉野川源流「水源地の森」
（川上村神之谷字三之公）着
 - ・昼食
- 13:00 水源地の森散策
 - ・人工林の見学
 - ・原生林等で自然観察
- 16:00 水源地の森発
- 16:30 料理旅館「朝日館」（川上村柏木）着
 - ・薪で焚いた風呂への入浴
 - ・夕食
 - ・宿泊

2日目

- 7:30 朝食
- 9:00 朝日館発
 - ・柏木地区散策
- 9:30 柏木発
- 9:50 上谷（こうだに）地区着
 - ・上谷地区散策
- 10:30 作業体験
 - ・道路や神社等の清掃
 - ・薪割り
- 12:00 昼食
 - ・おにぎり弁当
- 13:00 作業再開
- 14:30 上谷発
 - ・粉尾（そぎお）の人工林経由
- 15:30 森と水の源流館着
 - ・解説と見学
- 16:00 森と水の源流館発
- 17:00 大和上市駅着

川上村訪問前には、奈良教育大学附属小学校にて10年以上にわたり4年生を対象とした川上村での日帰り林業学習を主導している中窪寿弥教諭から、学習内容について教示を受けた⁽⁵⁾。川上村訪問後には、2015年度に林業学習をおこなった児童が作成した「川上村林業新聞」を借用し、子どもの視点で見た川上村の林業について認識を深めた。この林業学習の川上村での主たる訪問地は、筆者らの2日目の訪問地のひとつである粉尾（そぎお）の人工林であるため、現地に対する学生と児童の視点の違いや児童の学んだ林業関係の作業について、比較的理解が容易であった。

とはいえ、本稿の課題は林業ではなく山村地域（山間地域）である。学生は、山村地域の状況や価値について奈良盆地の子どもたち（主に小学校4年生）の理解をいかにして深めるかを考え、授業案を作成した。このうちのひとつについては、2016年2月15日に奈良市立都跡小学校において学生が山方貴順教諭の担任する4年生の学

級で授業実践をおこなった。授業案作成に際しても、中
 窪教諭および山方教諭から学生への助言を得た。また、
 授業実践の経験をふまえた形で授業の改善案も検討し
 た。

2. 山村地域に関する授業案の作成

学生たちは3つのグループに分かれ、小学校4年生向
 けの45分間の授業案を作成した。これらはいずれも、作
 成の初期段階でプレゼンテーションをおこない、現職の
 小学校教員である中窪からの助言を得た後に修正したも
 のである。

その後、授業案の加筆修正を繰り返した。その過程で、
 現職の小学校教員である山方のクラスで学生が授業を試
 行できることになったため、山方からの添削も受けた。

以下では学生の考案した、地域条件に見合った暮らし
 の存在に着目した授業、住民が山村で暮らし続ける要因
 を考える授業、水の流れによるつながりに着目した授業
 の3案を示す。なお、山方の配慮により、授業実践をお
 こなうクラスにおいては川上村出身で「林業の父」とも
 呼ばれる土倉庄三郎を郷土の偉人として事前に学習する
 ことになった。したがって、このことを前提とした授業
 案になっている。なお、授業案のフォーマットは特に指
 定しなかったためばらばらである。ご容赦願いたい。

2.1. 地域条件に見合った暮らしの存在に着目した授業

○目標

- ・奈良県内の他地域について知る。
- ・自分たちと違う暮らしを知り、その土地の風土や植生
 に合った暮らしがあること（生活の多様性）を理解する。

○本時の流れ

	教師の活動	児童の主な発言
導入 15分	・上谷の人の写真を見 せる ・上谷の全体写真（図 1）を見せる 「ここは何県でしょ う？」 →奈良県川上村である ことを伝え、そこで杉 の木（木材）が特産物 であることを伝える。 その際、川上村で作ら れた木材の民芸品を見 せて、実際に触らせる	「お年寄りばかり」 「家少ない」「周り山 ばっかや」 「長野」「鳥根」「鳥取」 「岐阜」

	「この写真の人を含め て、上谷には何人の人 が住んでいるでしょ う？」 →現在、上谷には5人 しか暮らしていないこ とを伝える	「10人」「100人」「50人」 「うそやん」「少ない」
	たった5人で上谷ではどんな暮らしをして いるのだろうか？	
展開 20分	○自分の暮らしと比較 してみよう ・上谷の民家の様子を 写真で見せる（写真2） ・薪を使った暮らし ・半自給自足の暮らし →川上村全体がこのよ うな生活ではないこと も伝える 「5人で暮らしていて 困ることはないだろ うか？」 →写真とともに、側道 掃除や神社の参道掃除 などを手伝ったこと を話す	「ガスはないの？」 「コンビニはないの？」 「重い物持てない」 「土砂崩れになったら 何もできない」 「道路は役所の人がや らないの」
	上谷での生活と同じような生活を送ってい る地域はあるだろうか？	
	・ネパールの写真を見 せる →世界の各地では、い まだ自然に左右される 生活をしている場所が あることを伝え、上谷 の暮らしとの類似点を 示す →上谷の暮らしは特別 な暮らしではなく、そ の地域に住む人にとっ て当たり前の暮らしで あることを考えさせる	「さっきの所と風景が 似ている」 「同じように薪を使っ ている」
まとめ 10分	20年後、上谷はどうなっていると思うか？	

<p>・20年後になくなってしまふかもしれない地域であることを伝え、そのような地域が他にもたくさんあることも伝える</p> <p>・RESAS⁽⁶⁾で川上村の人口増減のグラフを見せる(図3)</p> <p>→川上村全体が上谷と同じく、数十年後になくなってしまふかもしれない地域であることに気づかせる</p>	<p>「なくなっていると思う」</p> <p>「10人くらいに増えている」</p>
--	---

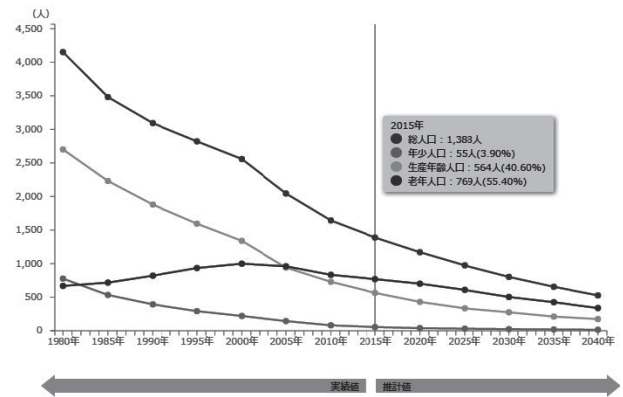


図3 RESASの表示画面で見る川上村の人口推移

1990年から2010年までは「国勢調査」のデータに基づく実績値、2015年から2040年までは「国立社会保障・人口問題研究所」のデータに基づく推計値である。総人口、年少人口、生産年齢人口、老年人口が記されている。



図1 上谷集落を一望



図2 上谷集落の民家に見られる薪

2.2. 住民が山村で暮らし続ける要因を考える授業

本授業案については、学生が作成したものに現職の小学校教員である山方がコメント(2回目)したものを、指導の様子が伝わるようあえてそのまま掲載する。ただし、授業経験の少ない学生は、現職教員のコメントから大きな影響を受けることが予想される。また、授業経験が少ない場合には、授業をやってみて、成功や失敗を自分の経験として蓄積していくことが重要である。そこで山方は、授業内容が大きく変わるようなコメントは避け、授業全般に関わることや、学級の児童に混乱を招くような活動に対してコメントする程度に留めるよう配慮した。

1. 目標

文化や生活の違う人々の暮らしを知る活動を通じて、周囲の人たちに文化や生活の違いを伝えることができる(山方:誰にででしょうか?家の人なら、この時間だけでは目標が達成できませんね。)

2. 評価規準(山方:評価規準は、授業後の児童の理想像を書くものです。語尾は「～～している」となります。)

- ・山間部と都市部の比較を通じて地域における文化や生活の違いを理解する(知識・理解)
- ・地域にはそれぞれの文化や歴史、生活があり、様々な情報からその地域に住みつづける人々の思いを考えることができる。(思考・判断・表現)

以下、Tは教師、Sは児童を指す。

項目	教師の活動	児童の活動	留意点
導入 (10)	<p>自分の地域について知る 奈良市の ・人口、面積 ・歴史(平城宮跡) を復習する</p> <p>T:「みんなは自分の地域のどんなところが好きかな?」 S:「歴史がいっぱいあって、コンビニもスーパーも近い!」 T:「なるほど、じゃあみんなが別の地域に住むとしたらどうか、考えてみよう」(山方:何について考えるかを明確に伝えないと、子どもは考えにくいと思います。) 奈良市の位置を確認させる。(地図の見方の確認)</p> <p>T:「今日は奈良市と全く違う、奈良県川上村について学びます。今日帰って、川上村の良さをお父さんお母さんに話ができるようにワークシートに書いていこう」(山方:近年、複雑な家庭環境を抱える児童が増えてきたと言われていています。「お家の人」くらいでいかがでしょうか。)</p>	<p>自分の地域について復習する 各々の項目をワークシートに記入する</p> <p>自分の地域の良さについて考える</p>	<p>・平城宮跡の写真</p> <p>・フラッシュカードを用いる</p>

展開① (15)	<p>・川上村について学ぶ ・人口、面積、特産品について調べる。 調べた結果を発表させ、フラッシュカードを用いて説明する。 位置を確認させる(地図の見方の確認)</p> <p>土倉庄三郎について、児童の話を中心に説明する(山方:土倉庄三郎について、話はあまり出ないと思います。) ・明治時代に造林事業を展開した点</p> <p>T:次に、写真を見て気づいたことを書きましょう S:山が多い。パスが少なく不便</p> <p>T:今日は、川上村の中でも中心部から外れたところにある上谷という地域について紹介します 「かまどの写真(図4)、五右衛門風呂の写真(図5)、薪置き場と風呂沸かし場(図6)」 みんなはこれを見てどう思いますか? S:びっくり、昔の生活、不便そう</p>	<p>各々の項目についてインターネットで調べてワークシートに情報を記入する(山方:子どもは、なかなかスムーズに調べられないですよ。)</p> <p>写真を見て気づいたことをワークシートに記入する</p>	<p>情報をタブレット、電子黒板に写す ・奈良交通時刻表 ・川上村全景</p>
-------------	--	---	---

	主発問:なぜこの人たちは私たちにとって不便に見えるこの地域に住み続けているのでしょうか。		
展開② (15)	<p>・上谷の人々の立場に立って地域を見る目を養う</p> <p>T:みんなは上谷に住んでいる</p> <p>90歳のおじいちゃんとおばあちゃんです。生まれてからずっとかまどでご飯を作り、薪を割って生活してきました。しかし、都会に行ってしまった自分のことでも「こっちで一緒に住まないか」と誘われました。あなたには90年一緒に生活してきた家、仲間、上谷への熱い愛があります。あなたならどうしますか？</p>	<p>川上村の人々の思いを聞く</p> <p>自分の考えをワークシートに各自記入する(思考, 判断, 表現)</p>	<p>上谷に居続けることも、都会で住むこともどちらの意見も尊重する</p>
	<p>・考えを発表させる</p> <p>・実際に川上村に住んでいる人の思いを伝える</p> <p>「川上に住んでいたほうが気楽で、今までと同じようにのんびり暮らしたい」</p> <p>T:みんなから見たら不便かもしれないが、上谷の人々はそれを不便とは思っていない。むしろその生活が当たり前なのです。その地域には人々の暮らしや文化があり、それ</p>		

	を大切にすることがあるんです		
まとめ (10)	今日のこの話を家に帰ってお父さんお母さんに伝えるとしたらどのように伝えるでしょうか(山方:「どのように=方法」です。ね。「何を=内容」も重要な視点だと思います。)	ワークシートを記入する	ワークシートの回収



図4 川上村で使われているかまど(おくどさん)

写真は実際には川上村柏木の料理旅館「朝日館」である。



図5 川上村上谷の家庭で使われている五右衛門風呂



図6 川上村上谷の家庭で使われている薪

(以下、ワークシート)
奈良県について学ぼう
～奈良県川上村～

1. 自分の地域について学ぼう

奈良市ってどんなところ？

人口… 人
面積… km²

特産品…
歴史…

2. 川上村について学ぼう

川上村ってどんなところ？

人口… 人
面積… km²
特産品…
歴史…

3. みんなで考えよう

なぜ川上村の人々はわたしたちにとって不便に見えるこの地域に住み続けているのでしょうか。

わたしはこの地域に住み (続けます／続けません)

なぜなら, _____ です。

4. 授業の感想を書こう

今回の授業はどうでしたか。お父さんお母さんに川上村の話をするとなればどのような話をするのでしょうか。

2.3. 水の流れによるつながりに着目した授業

○目標と評価基準

単元の目標及び評価基準に準ずる

○準備物

・奈良県地図, 資料 (写真等)

○本時の展開

	学習内容	学習活動	指導上の留意事項
導入 10分	問【川上村はどこにあるだろう?】 問【川上村の特徴を挙げてみよう】	・奈良県の地図を広げ, その中で川上村はどこに位置するかを探す ・川上村の地図には何が見えるかを答える。 《山ばかり・吉野川が流れている・ダムがある》	・山地が多いこと, 吉野川が流れていること, ダムがあることの3点必ず出てくるよう, ヒントや誘導などを行う
	・人口, 人口密度, 高齢者割合, 小中学校数・生徒数について黒板に書き出す	・項目ごとに気がついたことを発表する。 《人口が少ない・高齢者が	・奈良市と川上村に分け, 比較させながら書いていく

<p>気づいたことがある れば言わせる</p> <p>・集落ごとの人口 について口頭で伝 えていく。上谷に ついて少し触れ る</p> <p>問【中心となる産業 はなんだろう?】 ・杉の生産と土倉 庄三郎について復 習する</p> <p>展開 30分</p> <p>問【吉野川はどん な川だろう? グ ループになって考 えてみよう】</p> <p>[3分] グループ [5分] 全体</p> <p>・吉野川につい ての特徴をまとめ る</p> <p>問【ダムの利用方 法にはどのよう なものがあるだろ う?】</p>	<p>多い・子ども が少ない》</p> <p>・気づいたこ とを発表する 《人がいなく なってしまう ・少なすぎる 》</p> <p>・手を挙げて 発表する《林 業》</p> <p>・今まで習っ たことを挙手 して発表する</p> <p>・グループに 分かれ、吉野 川の特徴を書 き出す ・もともと知 っている知識や、 資料から読み 取れることを 中心に考える ・ワークシー トに書き出し ていく</p> <p>・グループの 代表が、出て きた意見を發 表する</p> <p>・黒板の板書 をノートに写 す</p> <p>・ダムの利用 方法について、 考えを挙手し 発表する</p>	<p>・いわゆる限 界集落がある ことを示唆す る</p> <p>・適宜発問を 入れながら、 今までの復習 になるように 聞いていく</p> <p>・机間指導を 行い、グルー プ活動を促 す。苦しいと ころにはヒ ントを与える</p> <p>・各意見につ いて同じ意見 があるグルー プには挙手 させる。いく つ同意見のグ ループがあっ たのか、意見 の横に数字を 書いておく</p> <p>・補助情報と して、大迫ダ ムは農水省、 大滝ダムは国 交省管轄であ ることを伝え る</p>	<p>問【ダムをつくる には川をせき止 める必要があり ます。そうす ると、川沿 いの建物や道 路はどうな りますか? そ れでもあなた はダムをつ くりませんか? つくるとす ればなぜで すか?】</p> <p>・ダムの利用 法についてま とめる</p> <p>問【吉野川分水 というものを 知っています か? これは どういった 施設でしょ うか?】</p> <p>・幹線水路 図のプリン トを配布す る</p> <p>問【では、この 図を見てわか ることは何 でしょう?グ ループで考 えてみましょ う】</p> <p>・吉野川分水 とは何かを 説明する</p> <p>問【吉野川は 何県を流 れています か?】</p> <p>問【なぜ吉野 川分水を 作らなけ ればなら なかった のでしょ うか?】</p>	<p>・グループで ダムの建造 によってど うなるかを ワークシー トに記入す る</p> <p>・グループ内 で出した意 見をメモに 取る</p> <p>・つくる、つ くらないの 意見を選び 、その理由 を班でまと めて発表す る</p> <p>・板書を写 す</p> <p>・気づいたこ とを挙手で 発表する 《水を分け る・川を違 う方向に流 す》</p> <p>・グループで 何の図なの か、またそ れはどんな ことを示し ているのか を考える ・班で出た 意見をまと め、発表す る</p> <p>・《和歌山、 奈良》</p> <p>・グループで 話し合う ・ワークシー トに記入す る</p>	<p>・必ずしも良 いことばかり ではないこと に気づかせ 、考えさせる</p> <p>・写真を見せ る</p> <p>・なるべく具 体的に聞き 出すように する</p> <p>・机間指導を 行い、水路 図ではない 意見になっ ているの 班にはうま く誘導して 水路図であ ることを 気づかせる</p> <p>・紀の川とい う名前が正 式であることを 伝える</p> <p>・机間指導を 行い、議論 を促進させ る</p>
--	---	---	---	--	---

まとめ5分	<p>・大和平野(奈良盆地)の気候的特徴と、地理的な特徴によって慢性的な水不足であったこと、吉野川からの送水が念願であったことを説明し、まとめる</p>	<p>・ノートに板書を写す</p>	<p>・補助発問として 【どこに向かって送るのか?】 【なぜ水を送らなければならないのか?】 【水が足りなくなるのはなぜか?】</p>
	<p>・川上村では、吉野川の源流地として「川上宣言」などの環境への取り組みをしていることに触れ、水の大切さについて気付かせる</p> <p>・川上村と、奈良市を含めた北部地域は吉野川分水によってつながっており、私たちの源流の一部も川上村であることに気づかせる</p>	<p>・ノートとワークシートを見返しながら、本時で学んだことを復習する</p>	<p>・川の水を守るための取り組みや、森と水の源流館の資料などを補助資料として提示する</p>
	<p>・ワークシートの最後にわかったことと、考えたことを感想として書かせる</p>	<p>・山村地域とのつながり、決して自分たちと関係のない場所ではないことを実感する</p>	<p>・大和郡山市などで見られる、吉野川分水の標識の写真を提示し、実感を持たせる</p>
	<p>・ワークシートの最後にわかったことと、考えたことを感想として書かせる</p>	<p>ワークシートに記入する</p>	<p>・時間がなくなった場合は宿題にしてもよい</p> <p>・ワークシートは回収し、評価の対象とする</p>

3. 都跡小学校における授業の実践

3.1. 当日の授業

奈良市立都跡小学校4年生の1クラスを対象に、下記の通り45分間の授業をおこなった。前章の2および3の授業案からそれぞれ一部を取り出し、組み合わせた。

	学習内容	学習活動	指導上の留意事項
導入15分	<p>・自己紹介</p> <p>・めあての確認</p> <p>「奈良県南部ってどんなところだろう」</p> <p>・上谷の写真を見せる</p> <p>【ここには何人の人が住んでいるでしょう】</p> <p>・川上村ホームページを用いて上谷の人口を確認する</p> <p>・人口、人口密度、高齢者割合、小中学校数・生徒数について黒板に書き出す</p> <p>【この地域に若い人はいるでしょうか】</p> <p>・川上村年齢別人口を見せ、高齢化が進んでいることに気づかせる</p> <p>・人口が少ない点に関して、自分たちの地域と比較する(柏木、尼辻、佐紀)</p> <p>・【これは何の写真でしょう】</p> <p>五右衛門風呂の写真を提示する</p> <p>お風呂を沸かす際に薪を使っていることに気づかせる</p> <p>土倉庄三郎がこの地域で林業を発展させたことを復習する</p> <p>また、土倉式のスギの育て方で出た間伐材は先述の薪に使われていることを確認する</p>	<p>回答</p> <p>「100人」</p> <p>「70人」</p> <p>・項目ごとに気がついたことを発表する。《人口が少ない・高齢者が多い》</p> <p>回答</p> <p>「いない」</p> <p>「お風呂」</p> <p>「洗濯機」</p> <p>「井戸」</p> <p>「トイレ」</p> <p>五右衛門風呂の使い方を考える</p> <p>自分たちの住んでいる地域と生活様式が大きく違う点に気づく</p>	<p>・「奈良県のくらし」46ページの地図を見ながら授業を行う</p> <p>・奈良市と川上村に分け、比較させながら書いていく</p> <p>・川上村の特徴「人が少ない」「お年寄りが多い」を板書する</p>

<p>展開① 10分</p>	<p>遠足で訪れた布目ダムから、ダムの役割について考える</p> <p>【ダムを作るにはどうしたらよいでしょうか?】 水をためなければダムができないことに気づかせる</p> <p>【道路が先か、ためられた水が先か】 川上村の旧道（ダムへと続く道）の写真を見せ、現在ではダムの底に沈んでいる場所が昔は町であったことに気づかせる</p>	<p>「水量の調節」 「水不足」 「発電」 「洪水の防止」 「農業、工場用水」</p> <p>ダムを作ることは非常に大変な作業であることがわかる</p>	
<p>展開② 10分</p>	<p>【吉野川分水って何だろう?】</p> <p>【なぜ吉野川分水を作る必要があったのでしょうか?】</p> <p>川上村の人は、下流の人のためにきれいな水を流すことを考えているというのを伝える</p>	<p>「吉野川の水を北部の人でも使うことができるようにするため」</p> <p>「水不足」→「降水量が少ない」</p> <p>地理的条件に気づく</p>	<p>机間指導</p>
<p>まとめ 10分</p>	<p>・奈良と川上のつながりについて復習する</p>		

<p>「森、人、水」の共生、共存により私たちの生活が成り立っていることに気づかせる</p>	<p>・ワークシート、感想の記入</p>	
---	----------------------	--

<参考資料>



大滝ダム



上谷全景



五右衛門風呂

3.2. 授業を受けた児童の反応

授業の終わりに、児童に「授業を終えて、わかったこと」と、「授業を終えて、わからなかったこと、ききたいこと」を書いてもらった。恣意的な選択を避けるべく、ここでは全員のものを記す。

「わかったこと」の記入は下記の通りである。

- ・川上村の上谷に住んでいる人の数が5人
- ・上谷という小さな村の人口が5人というのを初めて知りました。川上村全体でも1000人くらいだというのがわかりました。
- ・川上村の人口は5人。
- ・お年よりが多くて、なかには100さい以上の人もいること
- ・川上村は奈良市より大きいのに川上村の人たちは奈良市より少ない
- ・川上村は人口が少ないし、その中でもお年よりが多いというのを初めて知りました。
- ・南部の方は人口がすごくすくなくて、たいへんだと分かりました。南部の方は、五右衛門風呂という昔の風呂だと分かりました。
- ・川上村の人は少なく、約1600人ほどしかいないこと。
- ・奈良県の南部には、子どもが少なく、全体的に人数が少ないと分かりました。
- ・人口が少ない。あまり雨がふらない。空き屋が多い。
- ・川上村の写真を見て家は多いのに人口はすくないとはじめてしりました。
- ・川上村は大きいのに、人口は5人で、とてもすくなくて、おどろきました。なので、人がへってくると森がなくなってくるので、たくさんの方が来てくれたらと思いました。
- ・川上村は人口が少ない。上谷という所は人口が5人。お年よりが川上村は多い。
- ・わたしは川上村の人口がすくなくて、おじいちゃんおばあちゃんが多いことや、今でもごえもん風呂だということを知りました。
- ・川上村の人が川をきれいにするとりくみをしていること
- ・山の方の人たちが大変だということ。
- ・南の方は、お年よりが多いこと。
- ・川上村は人が少ない、お年よりが多いということがわかった。
- ・ダムから放水された水は、発電、工業などにも使われていること
- ・ダムは、発電させていることが分かった。
- ・ダムが、洪水を防止したり、水不足を防いだり、ダムってとても重要なことがわかりました。
- ・ダムは洪水を防止したり水不足をふせいだりする。
- ・ダムは、発電や農業の水などにも、役に立つと分かりました。川をせき止めると、近くの家や建物などが沈むということも分かりました。
- ・ダムを作る時に、洪水を防止したり、水不足をなくしたり、発電したりと良い所がたくさんあるけれど、そこに住んでいた人の家も失くなってしまったこと。
- ・ダムを作るには川の近くに住んでいる人の協力が必要だと分かりました。
- ・ダムを作る所の近くの家の人に協力してもらった。
- ・ダムを作るには40年かかった。
- ・川をせきとめてダムを作るととても大変になること。
- ・川上村のダムは、どしゃや木でうまるかもしれないというもんだいをかかえている。
- ・吉野川分水は北部に吉野川を流すことが分かった。流す理由は農業・工業のために流していることが分かった。
- ・ダムとかのほかの市に水を流すのに川上村の人たちが木のせわをしてくれてる。
- ・ほくは、森と水と人はとっても大切で、人がなくなると木がくずれ、水かきたなくなるとということがわかりました。
- ・森・人・水はつながっている。つながっているから森はできているということが、すごくわかりました。
- ・森と人と水はつながっているということ。
- ・森と人と水はつながっているということが分かりました。森は人が手入れしないと成り立たないということ。
- ・木の手入れをする人がなくなると「地すべりや、土しゃくずれ」が多くなるということ。
- ・村にすんでいる人のおかげで、森や川が、きれいだったりすることが分かりました。
- ・森は若い人達で守っていかないといけないんだとわかりました。
- ・昔は雨が少なくて水不足だったことがわかりました。

→勉強すると、昔は雨が少なかったからため池をしていました。

→でも結果はこうだと初めて知りました。

・吉野川分水など、よくわかるようにゆっくりといねいに教えてくれて人口や川上村など教えてくれたのでよかったです。

このように、人口やその密度の違い、川上村における高齢者の割合の大きさへの関心は持たせることができた。また、ダム役割と犠牲について考える機会ともなった。さらに、森と人と水のつながりや、森林への人の関わりについて認識を深めることができた。

しかし、降雨量が少なく水不足に見舞われていたのは奈良盆地であり、降雨量の多い川上村ではない。人口が5人なのは上谷地区であって川上村全体ではない。川上村、あるいは奈良県南部のすべての世帯で五右衛門風呂を日常的に用いているわけではない。これらの点の事実誤認を一部で招いている。

一方、「わからなかったこと、ききたいこと」には以下の記入があった。

- ・川上村の昔の人口（何人へったか）
- ・なぜ南には人口がどんどんへっているのかもっと知りたい。なぜお年よりが多いのか知りたい。
- ・人口が川上村は少ないから、どうすればいいのか
- ・川上村はお年よりが多くてこまっていることはあるのか。
- ・なぜ人口がへっていくのか。なぜ若者がへっていくのだろう（どこがいけないのか）
- ・もっと川上村のことを知りたいです。
- ・もっと村のことをくわしく知りたいです。
- ・もっと川上村のことや、吉野川分水のことについて知りたいです。
- ・川上村で有名な物やでんとうなど、どんな物があるんですか。
- ・見学の時おいしいものってなんですか。
- ・木のせわをしている人はどれぐらいいる。
- ・イノシシをつかまえるしかけを知りたいです。
- ・ごえもんぶろはどんなしくみか
- ・ごえもんぶろについてくわしくききたい。
- ・ごえもんぶろについてもう少し知りたいです。
- ・なぜ五えもん風呂を使って、電気を使ったお風呂を使わないのか。
- ・なぜ川上村の人の家のおふろは五右衛門風呂なのか？
- ・五右衛門ぶろのはいり方は？
- ・ダムはなぜあるのか。ダムはどうやって水をきれいにするのか。
- ・ダム
- ・北の方には、ダムがあるのか。東、西も
- ・ダムは40年かけて作ったのは何人でやったのか。

・ききたいことは、ダム工事などでしずんだ物などは、全てしずむのか。

・もし山から木がくずれてきたらどうするのか？（ダムの前に）

・土しゃくずれで、ダムに土しゃが入って、取りのぞくのはどこでとりのぞくのですか？

・奈良盆地には大きな川がないけど、なぜ川を作らないだろうかを知りたいです。

・授業をしての感想

以上、「わかったこと」と同様に人口やダムについて多くの記入がある一方、川上村そのものや五右衛門風呂への興味が表れていることがわかる。

3.3. 授業を見ていた教員や他の学生の反応

児童の反応はよいものの、内容を詰め込みすぎという意見が多く出された。45分間なので、主題はひとつにして、伝えたいことや考えることをシンプルにする必要がある。

また、人口に関する内容は興味を引きつけやすいものの、それが本当に伝えたいことなのかという意見もあった。人口に関する内容と、ダムや水に関する内容が、うまくつながっていないという意見も出された。

4. 授業の実践を受けた改善案

前章の授業をおこなった学生は、観覧した教員や学生の反応をふまえ、下記の授業案を考えた。ただし、児童が授業後に記入した紙はこの改善案作成後に入手したため、反映されていない。

○目標

森と水と、わたしたちのくらしのつながりを理解する。

○評価規準

関心意欲態度： 林業は山を守る仕事であり、川を守る仕事にもなっている。北部地域のくらしも、南部地域と深くかかわりあっているのだという認識を持つことができる。

思考判断表現： 吉野川分水における奈良市と川上村のつながりについて考えることができる。

○準備物

・奈良県地図、資料（写真等）

○本時の展開

	学習内容	児童の学習活動	指導上の留意事項
導入 10分	吉野杉でできた箸を子どもたちに一人一本ずつ配る		

<p>問【みんながいつも使っている割りばしと何が違うだろう？ ノートに5つ書いてみよう】</p> <p>3分経ってから、この日の日付と同じ出席番号の生徒を当てて発表させる。その生徒の近くであと3人ほど発表させ、その他にも違う意見を持っている生徒には挙手で発表させる</p> <p>「この箸は、吉野杉でできています」</p> <p>吉野杉や土倉庄三郎について以前学習したことを振り返る。林業とはどういった産業であったか、なぜ吉野杉はブランド化したのか、奈良県南部地域では林業が中心産業となっていることに触れる</p> <p>・その林業で間伐材をこのように箸にして売っており、資源を有効活用している</p> <p>「さらに、この箸は、奈良県の川上村というところで作られました。」</p>	<p>ノートに気づいたことを書き出す予想される反応 「におい」「硬さ、頑丈さ」など</p> <p>・発表者の意見も自分でノートに取っていく</p> <p>・以前のノートを振り返る</p>	<p>机間指導を行い、滞っている生徒にはヒントを出してあげる</p> <p>黒板に書き出していく</p> <p>必ず発言に忠実に板書する。違った意図で省略しないよう気を付ける</p> <p>・限界集落があることを示唆する</p> <p>・適宜発問を入れながら、今までの復習になるように聞いていく</p>	<p>川上村がどんな村なのか、副教材「奈良県の暮らし」で県の位置・標高や地理的特徴を確認する</p> <p>川上村ホームページの表を見る</p> <p>・人口、人口密度、高齢者割合、小中学校数・生徒数について気づいたことがあれば言わせる</p> <p>・集落ごとの人口について口頭で伝えていく。上谷についても触れる</p> <p>自分たちの住む地域との違いを理解する</p> <p>問【川上村は「吉野川」の源流にあるけど、この水はどこに流れていくのだろうか？】</p>	<p>「奈良県の暮らし」を開く</p> <p>・気づいたことをノートに取らせる</p>	<p>展開25分</p> <p>・「奈良県の暮らし」の水路図をたどってみる。紀の川になって大阪湾に流れ出していることや、分岐点となっている《吉野川分水》を紹介する</p> <p>問【なぜ吉野川分水を作らなければならなかったのでしょうか？ 考えた答えをノートに二つ、書き出してみよう】</p> <p>・机間指導を行い、グループ活動を促す。苦しいところにはヒントを与える</p> <p>・各意見について同じ意見があるグループには挙手させる。いくつ同意見のグループがあったのか、意見の横に数字を書いておく</p>
---	---	---	--	---	---

<ul style="list-style-type: none"> ・班で意見を交換し合ってお互いの意見をノートに書き留める ・一つの班に代表でどんな意見が出たのか答えてもらい、それ以外の意見が出た班からは挙手で聞く ・大和平野(奈良盆地)の気候的特徴と、地理的な特徴によって慢性的な水不足であったこと、吉野川からの送水が念願であったことを説明し、まとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・ここでの補助情報として、大迫ダムは農水省、大滝ダムは国交省管轄であることを伝える 評価 {思考判断表現} ・発問に対する答えを、班の意見をもとに考えさせる
<p>まとめ10分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川上村と、奈良市を含めた北部地域は吉野川分水によってつながっており、私たちの源流の一部も川上村であることに気づかせる ・林業は山を守る仕事であり、川を守る仕事にもなっている。北部地域のくらしも、南部地域と深くかわりあっているのだという認識を持つ ・ノートにわかったことと、考えたことを感想として書かせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートを見返しながら、本時で学んだことを復習する ・山村地域とのつながり、決して自分たちと関係のない場所ではないことを実感する ・ワークシートに記入する 	<p>大和郡山市などで見られる、吉野川分水の標識の写真を提示し、実感を持たせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間がなくなった場合は宿題にしてもよい ・ワークシートは回収し、評価の対象とする 評価 {関心意欲態度}

5. まとめと展望

本研究の第一の目的は、地域多様性、とりわけ奈良県におけるそれに関して、子どもの理解を深めるにはどうしたらよいかを検討することであった。特に、奈良県の中でも人口の集中している奈良盆地の子どもたちが、森林や山村の卓越する奈良県南部について理解を深めるための工夫を考えた。

これについては、いかに学習者にとっての自分事にするかが肝となった。奈良盆地に暮らす学習者にとっての利害関係のあるものとして、吉野川分水を介した水のつながりを取りあげることが効果的であった。

しかし、同じ奈良県にいるのだから県内のことを知ろうという形で、はたして十分であろうか。もっと山村地域には普遍的な価値があるのではないか。本稿の取り組みは、常にそのことを意識したものでもあった。奈良盆地に暮らす学習者が同じ県内の川上村という山村にふれることによって育成される多文化理解という視点は、川上村に限らず他の地域(県内・県外、あるいは海外)を理解しようという時に生きてくる視点になると考えている。奈良県南部、とりわけ学生の多くが取り上げた川上村上谷の暮らしは、行政区域として同じ奈良県という枠ではあっても、奈良盆地の子どもたちにとってけっして「身近な地域」として感じられるものではない。基本的には「異文化」であり「他者」である。だからこそ、あえてネパールの山村の暮らしと結びつけて理解させようという授業案も考案された。他者理解、自然との向かい合い方、共生の仕方、未来への責任など、本稿の取り組みはESD(持続可能な開発のための教育)にふさわしい要素をもっているだけに、比較的近い場所にある山村地域を活かした学びの可能性は今後大いに検討されるべきと考える。このことは、被災地の理解、被差別地域の理解、海外各地の暮らしの理解などと通じる面もある。これらに関する既存の実践例を参照することも有用かもしれない。これは今後の課題である。

ただし、本稿の取り組みは45分間の授業1回という制約に縛られたものであった。これは授業実践の受け入れ校側、および授業を試行する学生の双方の負担とともに、「総合的な学習の時間ならばともかく、社会科の中にこの取り組みが位置づけにくい」という現職教員の声もあってのものであった。時間に余裕を持たせ、児童の主体的な学びを紡ぎ出すためには、この点も考えなければならない。地域多様性理解という視点から、社会科の学習指導要領を分析し、改善案を示すことも必要と考える。

本稿の第二の目的は、奈良県に位置する教員養成大学である奈良教育大学の学生が、奈良県南部についてフィールド学習を通じて理解を深め、その成果を授業で

活かすための道筋について検討することであった。これについては、対象地域についてそれなりに知識と経験と人脈をもつ地理学担当教員（河本）が、地域の方々のお世話になって学びのフィールドを創出し、附属小学校の教員（中窪）が同じ地域での小学生を対象とした分厚い教育経験の蓄積をもとにした助言を学生に対しておこない、かつ大学の近くに位置する公立小学校の教員（山方）が現職教員としての助言と授業実践の場を学生に提供するという、教員養成大学としての理想的な取り組みの道筋のひとつを具体化することができた。ただし、本取り組みを行った2015年度後期は対象科目の受講生が少数であり、特に女子学生や社会科教育専修以外の学生を対象とした検討がほとんどできなかった。本取り組みで得た経験や人脈を活かし、地域多様性理解を促進できる教員の養成に向けて今後内容を深化させていきたい。

[付記] 本研究に係る取り組みは、奈良教育大学の平成27年度概算要求特別経費「ESDを核とした教員養成の高度化—教員養成・研修におけるESDモデルプログラムの開発と普及—」の「ESDプロジェクト」のひとつとして実施しました。「森と水の源流館」の木村正邦様、辻谷達夫様や上谷地区をはじめとする川上村の皆様、奈良市立都跡小学校の皆様、都跡小学校や附属小学校とつないでくださいました本学の中澤静男准教授など、お世話になりました皆様にご心より厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 林野庁「平成25年度 森林・林業白書 参考資料」等による。
- (2) こうした状況は、奈良県に限られたものではない。兵庫県については、下記を参照されたい。河本大地（2015）：兵庫県の地域多様性を学校教育で活かすにはどうしたらよいか—兵庫地理学協会の参加型ワークショップから

- 一、神戸夙川学院大学・夙川学院短期大学教育実践研究紀要, 2013-2014年度合併号, pp.5-10.
- (3) 地理関連学会連合が2005年に提起した概念で、「地域の個性」や「地域生態システム」の弱体化や崩壊への懸念が強調されている。その後、河本はこの概念の深化と応用を試みている。河本大地（2011）：ジオツーリズムと地理学発「地域多様性」概念—「ジオ」の視点を持続的地域社会づくりに生かすために—。地学雑誌, 120-5, pp.775-785。河本大地（2014）：「都市農村交流」を中心としてきた日本のグリーンツーリズムの課題とあり方—農村地域の未来可能性を高めるために—。神戸夙川学院大学観光文化学部紀要, 5, pp.64-72.
- (4) 川上村を選んだのは、河本が前任校で16回実施してきた観光文化学部「自然環境保全論」受講者向けの1泊2日のエコツアーの内容（原生林、人工林・林業、山村の暮らしの3つについて五感で学ぶ）が、奈良教育大学においても有効であり、本研究の目的にかなうと考えたためである。前任校での取り組みについては下記を参照されたい。河本大地（2015）：川上村にお世話になった神戸夙川学院大学の8年間。ぼたり—源流のひとつしずく—（森と水の源流館 機関誌）, 32.
- (5) この取り組みについては、少し前のものになるが下記を参照されたい。中窪寿弥（2011）：4年 地域のプロに学ぶ社会見学—田原のお茶づくりと川上村の林業—。歴史地理教育, 778.
- (6) RESAS(リーサス)とは、地域経済分析システム(Regional Economy Society Analyzing System)の略称であり、2015年に内閣官房(まち・ひと・しごと創生本部事務局)および経済産業省が提供し始めたシステムのことである。いわゆる「ビッグデータ」をもとに地域の現状と課題を把握することで、その特色を活かすことのできる地方創生のためのプログラムとして構築された。これを活用した授業案については、筆者らによる下記を参照されたい。河本大地・豊田大介・二階堂泰樹・高翔・佐藤絢香・松村歩美・谷口空・西山厚人（2016）：地域経済分析システム(RESAS(リーサス))を活用した地理授業の提案—中学校社会科(地理的分野)の場合—。奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 2, pp.157-166.

